

[原著論文]

学生の自己学習能力を育てる自己評価 －基礎ゼミ I 学生自己評価と教員評価－

木部美知子, 中山和美, 栗原弥生, 本間千代子

キーワード：自己教育力、自己評価、自己学習能力、学生、教員

Self-evaluation to bring up self-learning ability of a student － Basics seminar I student self-evaluation and teacher evaluation －

Michiko Kibe Kazumi Nakayama Yayoi Kurihara Chiyoko Honnma

Abstract

Survey on self-evaluation and teacher-evaluation on nursing students attending the Basics seminar was carried out, together with questionnaires and answers to faculties/teaching staffs/on the relevance of students' learning outcome. The students held onto their significance of learning goal with good understanding of the aims of study. Self-evaluation is a practical teaching method to stimulate the students' motivation toward self-education. Reinforcement of ability to self-evaluation definitely increases the capability for self-learning.

keyword : self-directed learning, self-evaluation, self-learning ability, student, teacher

要旨

看護学科基礎ゼミ I 評価表と学生授業評価・教員アンケートの結果を単純集計しただけのものではあるが、「基礎ゼミ I」の学生の学習成果や教員の指導など全体の傾向をうかがいしることができた。この時期の学生の評価基準は達成・未達成、満足・不満足などの感覚と認識といった未熟なものであるが、評価結果から学生が学習目標の意義を自覚し、さらに自らの学習課題を実感していることがわかった。

はじめに

「基礎ゼミ I」は、健康管理や安全な学生生活、良好な人間関係づくりなど、入学間もない学生に対するガイダンス機能を含み、さらに今後の学習の基盤となる、文献検索やレポートの書き方など基本的な学習方法の習得を目的としている。また、新潟医療福祉大学の理念に基づく連携教育の 1 科目であり、各科共通の教養科目として位置づいている (図 8)。

平成 17 年 1 月 28 日中央教育審議会は「わが国の高等教育の将来像 (答申)」において、教養教育を「単なる入門

木部美知子 新潟医療福祉大学 医療技術学部 看護学科

[連絡先] 〒 950-0982 新潟市島見町 1398 番地
TEL/FAX : 025-257-4591
E-mail: kibe@nuhw.ac.jp

教育ではなく、専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考方法などの知的な技法の獲得や人間としてのあり方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の滋養という教養教育として充実した教育展開を目指すものである¹⁾と定義している。このように今日においては、教養教育の重要性が認識されてきている。

そこで今回、看護学科の学生を対象とした「基礎ゼミ I」において、学生自らが学びを振り返り、今後の学習課題の発見ができるよう学生による自己評価と、教員による学生の学習到達度評価を実施した。同時に教育開発委員会が実施した授業評価アンケートを用いて、学生の学習成果と教員のかかわりについて、若干の考察を得たので報告する。

I. 研究目的

「看護学科基礎ゼミ I 評価表」、「学生授業評価・教員アンケート」の集計結果から「基礎ゼミ I」の学習成果を明確にし、今後の「基礎ゼミ I」の教育目標、内容・方法・評価の検討に活用する。

II. 研究方法

1. 研究方法

- 1) 学習目標と教育開発委員会から提示された評価表をもとに、看護学科独自の「看護学科基礎ゼミ I 評価表」を作成した。看護学科は、発達段階に応じた看護師としてのキャリアアイデンティティの育成につながる教育(図9)を念頭に、教育開発委員会が提示している評価に、「情意領域」の評価項目を追加し、ブルームの「教育目標の分類体系」による3領域の視点から教育内容を学習構造化した、看護科独自の評価表を作成した。認知領域では「知識・理解・応用・分析・統合力」で6項目、精神運動領域では「学習力」として6項目、情意領域では「責任感、積極性、協調性、研究心、価値観」として8項目とした。評定尺度はリカーン法による5段階(5. 十分できた 4. おおむねできた 3. ほぼできた 2. 多少できた 1. できなかった)とした(表1)。
- 2) 「看護学科基礎ゼミ I 評価表」は授業の進行中に配布し、個々の学生が「基礎ゼミ I」における自らの学習の目標をイメージできるようにした。
- 3) 「基礎ゼミ I」の授業終了直後に同一の評価表を用いて、学生による自己評価と教員による学生評価を行い回収した。

表2 自己評価のねらい³⁾

1. 内在する自己学習能力の高揚を図る。
2. 教員が行う評価と自己評価を関連付けて学習意欲・学習内容の定着を図る。
3. 教師とのコミュニケーションを図る手段とする。
4. 評価観を変革する。
5. 学生が教師を評価するひとつの方法。

- 4) 教育開発委員会が実施した、「学生授業評価アンケートと教員アンケート」(評定基準は3段階)を委員会の了解を得て参照した。

2. 分析方法

- 1) 看護学科基礎ゼミ I 評価表(学生自己評価と教員による学生の学習到達度評価)を単純集計し、学習目標到達度をみた。
- 2) 学生の授業評価アンケートと教員アンケートのうち、「学習基礎技能の習得と学習基礎技能の指導」項目のみを参照して学生の学習到達度と教員の指導の関連を見た。

3. 倫理的配慮

学生、教員に対しこの研究の目的、方法、プライバシーの保護や参加の任意性について口頭で説明し、同意を得た。評価表は個人が特定されないようにした上でデータ入力した。使用後は各教員に返却され、学生のフィードバックに活用されることになっている。

III. 結果

1. 学生自己評価と教員評価の関連

回収された看護学科基礎ゼミ I 評価表は、学生用 76 名(回収率 87%)、教員用 69 名(回収率 79%)であった。看護学科基礎ゼミ I 評価表「I. 認知領域」における学生の自己評価と教員の評価は、(図1、図2)のごとくである。「II. 精神運動領域」、「III. 情意領域」においても学生の自己評価と教員の評価は、(図3~図6)のごとくである。

2. 学生の授業評価と教員アンケート(学習基礎技能習得の指導に関する項目)との関連

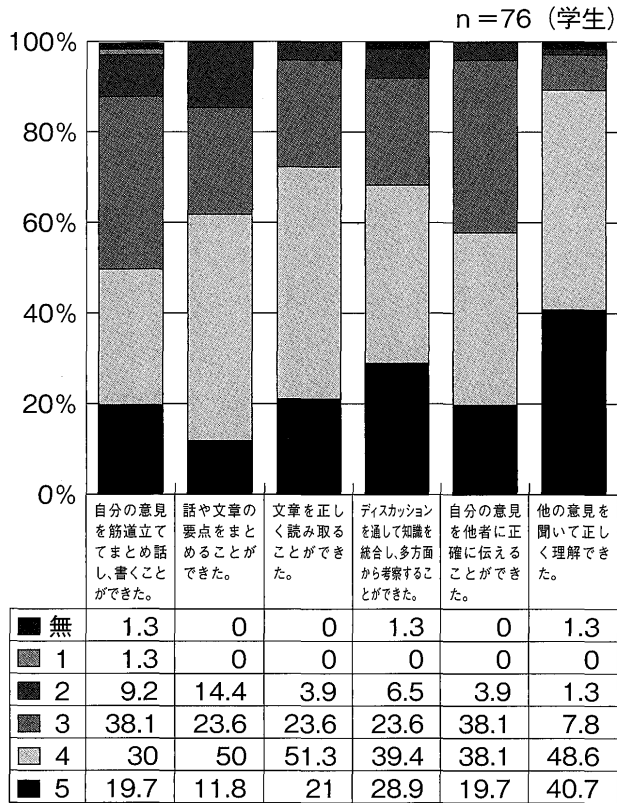
回収された学生授業評価アンケートは 87 名(回収率 100%)、教員アンケートは 15 名(回収率 78%)であった。学習基礎技能習得と指導の関係は(図7)のごとくである。

IV. 考察

看護学科の基礎ゼミ I は「『QOL のサポートは保健・医療・福祉の連携から』を学部として定着させ、3つの学部は独立した専門性を持ちつつ、常に連携を保ち、カリキュラムはもちろん教育精神としてのつながりをさらに強め、時代が求める QOL サポーターの育成を図る。」²⁾という

表3 自己教育力を構成する要素⁴⁾

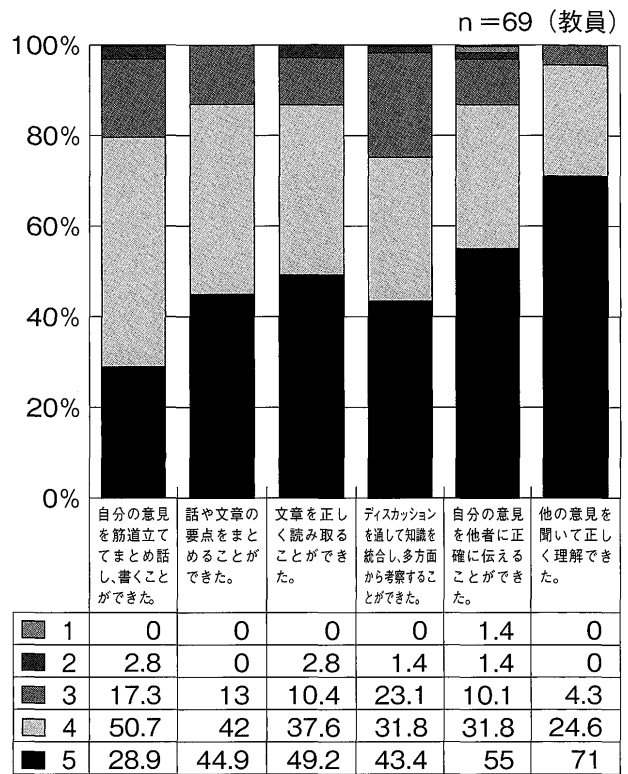
- (1) 学習意欲と意志力の形成
学習への動機付け
達成感・成熟感の育成
基礎・基本の徹底
- (2) 学習の仕方の習得
基本的学習姿勢の形成
問題解決的・問題探求的
学習法忍耐の意志的教育
作業的・体験的な学習



評定基準：5.十分にできた 4.おおむねできた
3.ほぼできた 2.多少できた 1.できなかった
注)評価内容は表1参照

図1 看護学科基礎ゼミ I 学生自己評価

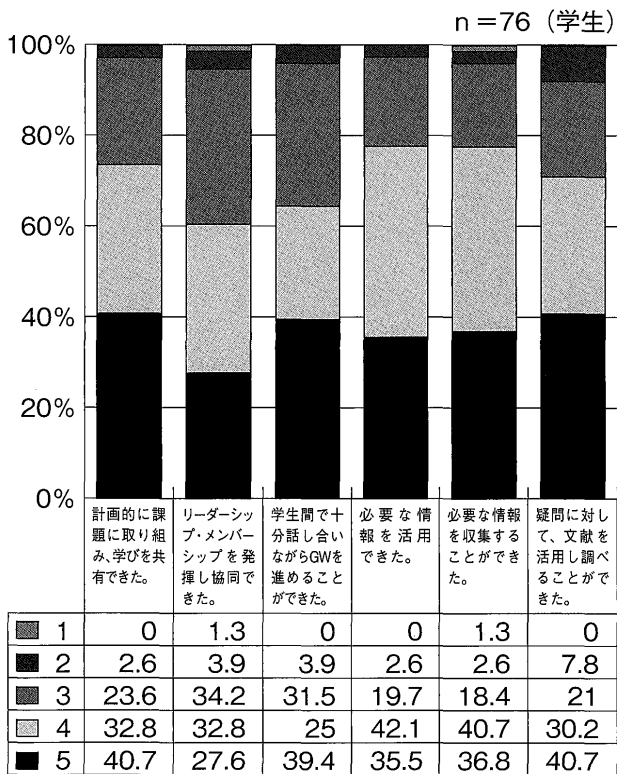
I. 認知領域：知識・理解・応用・分析・統合力



評定基準：5.十分にできた 4.おおむねできた
3.ほぼできた 2.多少できた 1.できなかった
注)評価内容は表1参照

図2 看護学科基礎ゼミ I 教員の学生評価

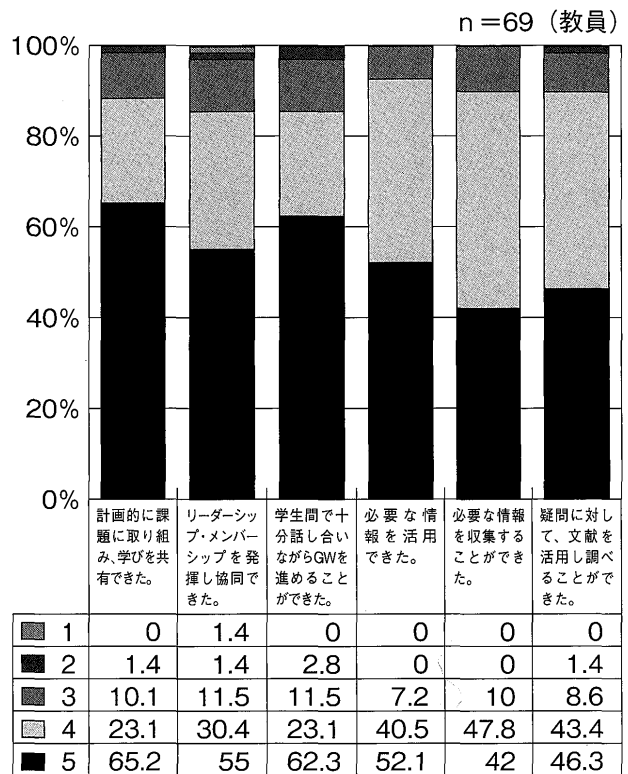
I. 認知領域：知識・理解・応用・分析・統合力



評定基準：5.十分にできた 4.おおむねできた
3.ほぼできた 2.多少できた 1.できなかった
注)評価内容は表1参照

図3 看護学科基礎ゼミ I 学生自己評価

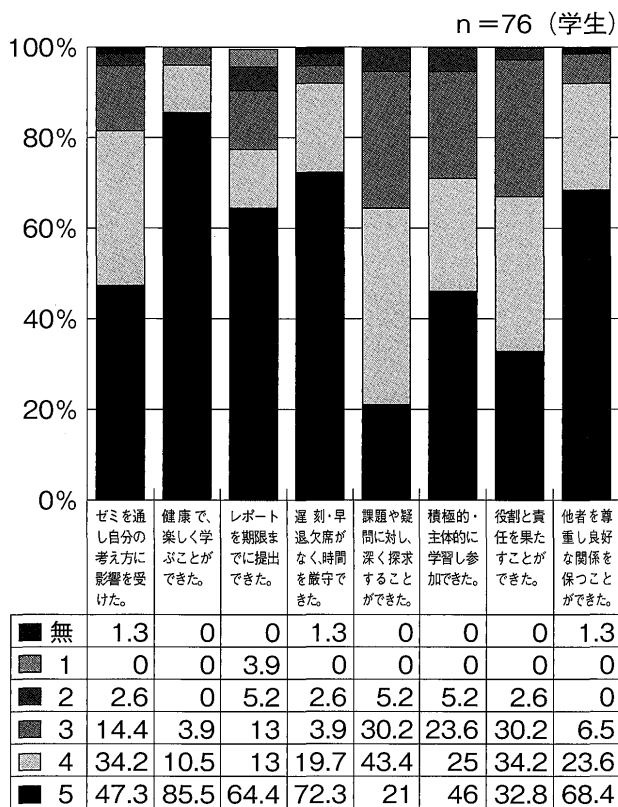
II. 精神運動領域：学習力



評定基準：5.十分にできた 4.おおむねできた
3.ほぼできた 2.多少できた 1.できなかった
注)評価内容は表1参照

図4 看護学科基礎ゼミ I 教員学生評価

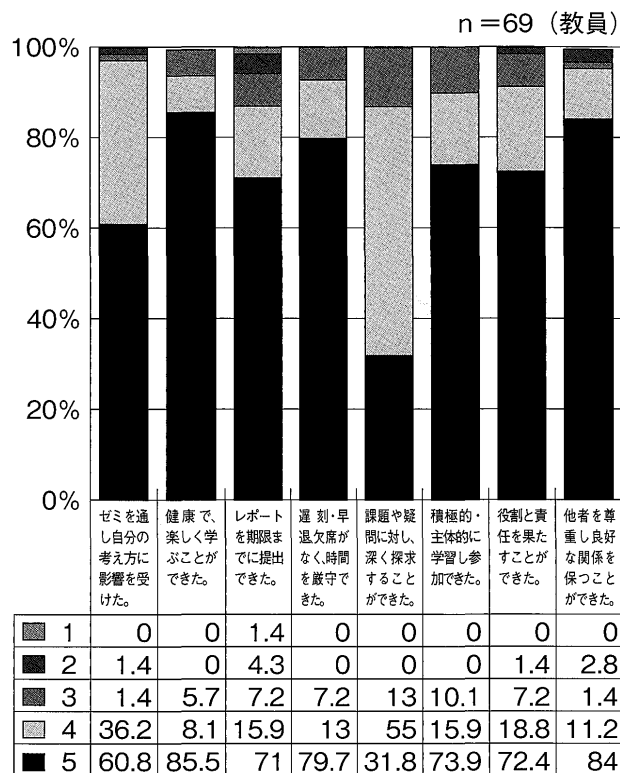
II. 精神運動領域：学習力



評定基準：5. 十分にできた 4. おおむねできた
3. ほぼできた 2. 多少できた 1. できなかった
注) 評価内容は表1参照

図5 看護学科基礎ゼミ I 学生自己評価

Ⅲ. 情意領域：責任感・積極性・協調性・価値観



評定基準：5. 十分にできた 4. おおむねできた
3. ほぼできた 2. 多少できた 1. できなかった
注) 評価内容は表1参照

図6 看護学科基礎ゼミ I 教員学生評価

Ⅲ. 情意領域：責任感・積極性・協調性・価値観

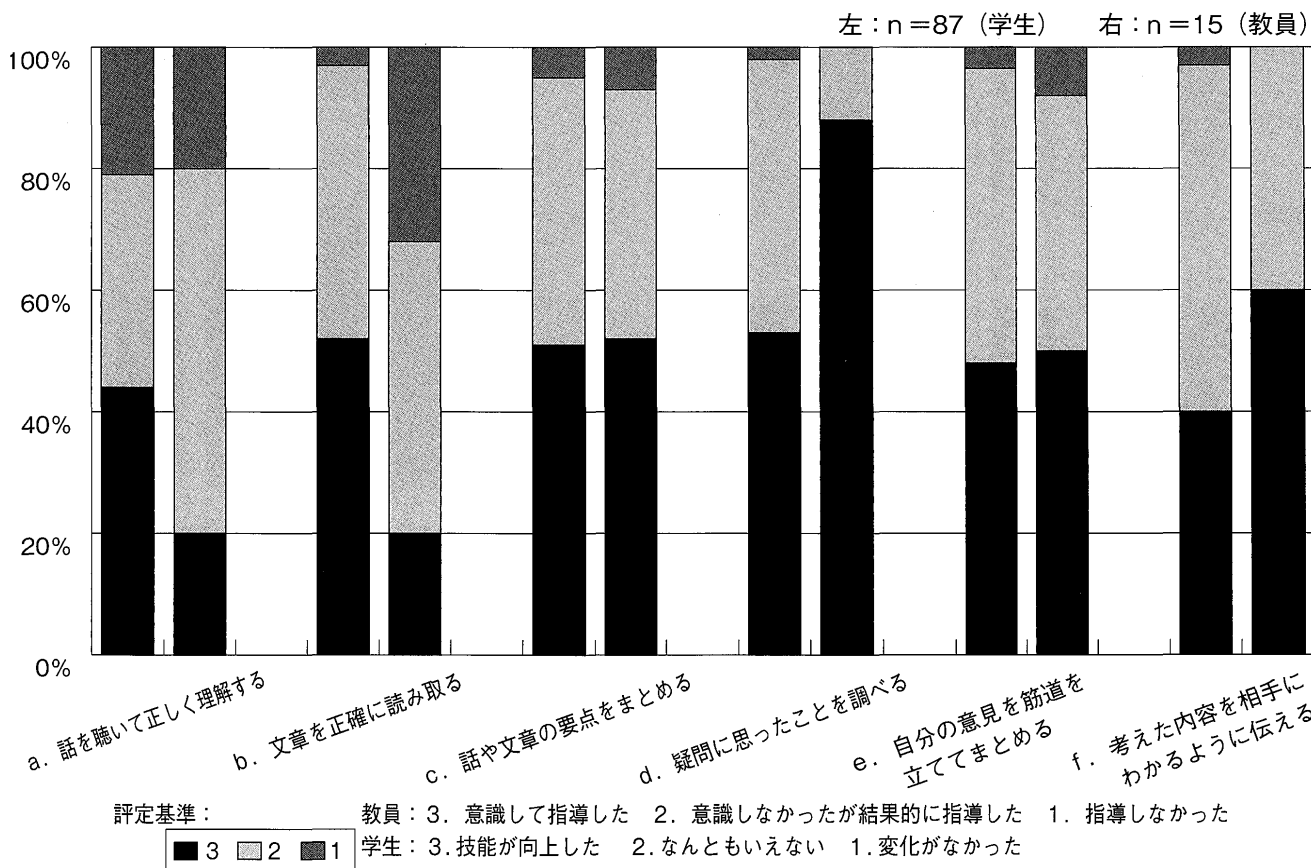


図7 学生の学習基礎技能習得と教員の指導
(教育開発委員会：学生授業評価・教員アンケートより)

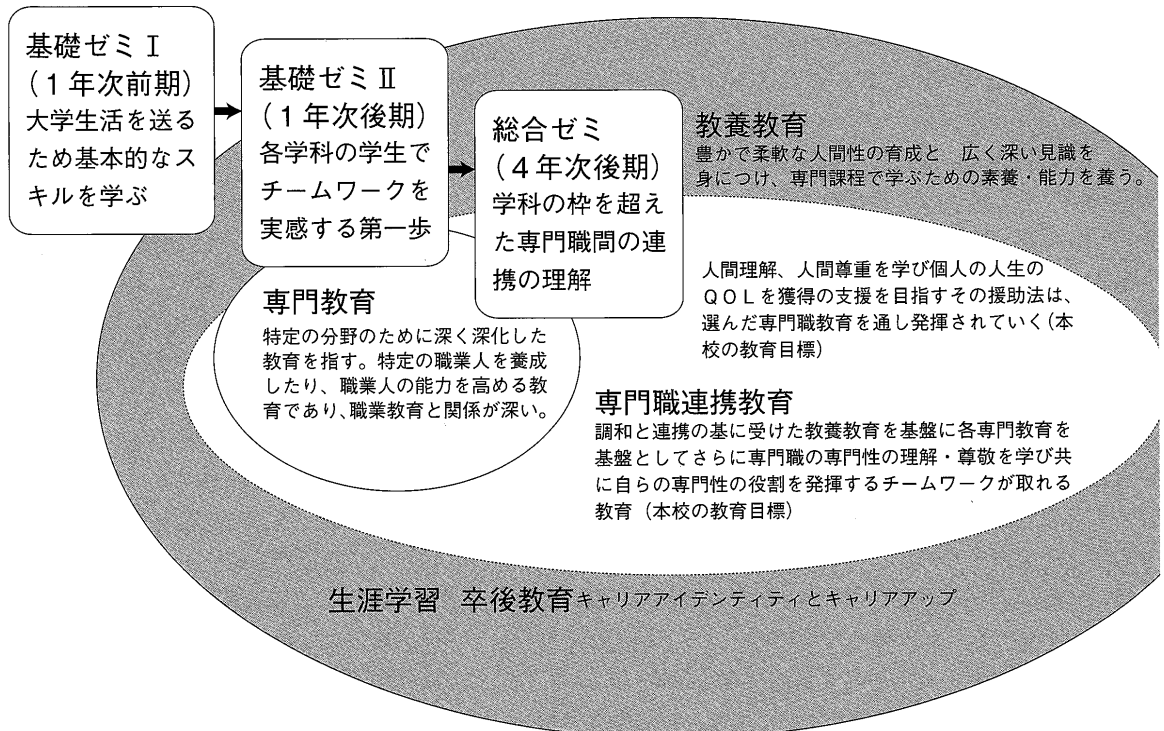


図8 教養教育・専門教育と基礎ゼミ・総合ゼミの関係モデル

新潟医療福祉大学の理念に基づく各科共通の科目である。そしてそれは単なる入門教育ではなく、専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考方法などの知的な技法の獲得や人間としてのあり方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の滋養という教養教育として充実した教育展開を目指すものである(図8)。

1. 学生自己評価と教員評価の関連

本研究は評価表を一手段として、「基礎ゼミ I」の学生の学習成果と教員の指導との関連を分析したことによって、全体の傾向をうかがい知ることができた。

この時期の学生の自己評価基準は達成・未達成、満足・不満足などの感覚と認識といった未熟なものであると言われている。しかし、今回の評価結果からは、学生が自分なりに学習目標の意義を自覚し、達成感や自己効力感さらに自らの学習課題を実感していることが推察された(図1、図3、図5)。一方、教員の評価は、学生に比しその評定が高くなっている(図2、図4、図6)。これは「基礎ゼミ I」での教育目的を踏まえ、外的には捉えにくい内的な学習の広がりや深まり、学習体験が今後の学習の基盤となる「体験目標」、「向上目標」に準じ評価を行っているためであると考えられる。このことは、この時期の評価のあり方を各教員が認識し、評価した結果であり、学生の学びを支えようとしている教員の姿勢を見て取ることができる。さらに「学生授業評価と教員アンケート」(図7)の関連をみると、教員が重点を置いた指導内容に対する学生の学習習得度がほぼ比例して高くなっている。教員は「話を聞

いたり、文章を読み取る」ことは大学入学前のレディネスであると考えていると思われ、結果を見ても「話を聞いたり文章を読む」ことについては、意図的に指導しなくても半数の学生が到達したと考えている。一方、「疑問をもって調べる」ことや「自分の意見を筋道立てて、人に分かるように話す」ことができることを意図的に指導しているということは、多くの教員が学生の主体的学習を促す指導が大学教育においては重要であると考えていることが推察され、同時に教員のかかわりの重要性を改めて認識することとなった。これらの結果は、今後、看護学科「基礎ゼミ I」の学習内容や進め方などの検討をしていくにあたり有効な情報となる。

2. 自己評価の意義

自己評価は、自分自身を振り返って自分なりに吟味する機会を提供し授業の中で、また学校生活のなかで自分なりの頑張りを見つめ直し、これをきっかけによりいっそう有効な学習の仕方や課題との取り組み方、学校での身の処し方などについても考えることができる(表1)。またこうした「振り返り」によって自分の認識の仕方について認識し、自分の学習の仕方について学習するといった「メタ認識」、「メタ学習」を成立させる。さらに自己評価が、外的な評価の認識を伴った形でなされるようになれば、独りよがりでない客観的な妥当性を持つ自己認識を成立させていくうえで、貴重なきっかけを与えるものとなる。教師は、学生が「自ら学ぶ力」を習得できるよう、学生の自己評価能力の発展を促すよう、関わっていく必要がある。

3. 自己教育力の育成

看護学科の「基礎ゼミⅠ」の評価は、学習目標に沿った「到達度評価表」を用いたが、これは学生の内面的な達成や成長を評価するには十分なツールとは言えない。「基礎ゼミⅠ」の目的は、健康管理や安全な学生生活、良好な人間関係づくりと後に続く学習の基盤となる学習技能「主体的に学ぶ意志、態度、能力」、「課題解決のための考える力・判断力」、「学習方法の習得」つまり自己教育力の習得にある。その評価の中心は1. 授業・活動への参加状況、2. 向上・成長の状況、3. 学習に関する習慣・態度、4. 対人関係のあり方、5. 自分自身の全体のあり方など、教師の外部の視点からの評価が困難な「関心・意欲・態度」といった「情意領域」の内面的な達成や成長であると考えられる。このような内面的な学びを評価するには、学習者自身が自らの学びを点検し吟味していく自己評価が適切である。また自己評価は単なる評価手法ということを超えた、教育そのものの手立てとして、特に人間形成の上で土台となる部分の教育を進めていくための本質的な意味を持っている。学生の自己評価能力を養い強化することは、自己教育力育成の中心課題であり、そのため教員の評価は、学生の「わかった」という実感レベルの学びや「進歩した」という内面の成長を見落とすことなく捉え、学生の自己評価を支えていくものでなければならない。

しかし外的な客観評価には限界があり、行動目標論的な

学生の到達度評価のみでは長期的、段階的な微妙な学生の成長変化を捉えることは難しい。行動目標論的评价は、「関心・意欲・態度」とか「思考力・判断力・表現力」といった「見えない学力」、つまり学力全体の土台となる部分が顧みられない評価にならざるを得ないのである。

評価をするに当たってはあらゆる視点や多様な方法をもって評価を行い、学生の成長をキャッチしていく努力をしなければならない。さらに自己教育力の育成にあたっては一斉画一的な教師中心の他律的・追従的学習から学生中心の多様な自律的・主体的学習への転換を図ることが重要である(表3)。

看護師にとって基礎教育に続く卒後教育・生涯教育において自己教育力はキャリアアップを図るために非常に重要なものである。また自己教育力は、学生が将来専門職としてキャリアを維持していくための重要な能力であり、基礎教育においても発達段階に応じたキャリアアイデンティティの育成をはかっていく必要がある(図9)。

専門職業人を育成し、教養教育の目指す「人間性の育成」や主体的学習能力を動機付ける「興味・関心・意欲・態度」といった「情意領域」の内面的な達成や成長などキャリアアイデンティティの育成につながる能力を養っていくためには、注入主義的な教育観や行動目標論的な到達度評価の限界を知り、教育観の転換と新しい評価観を持つ必要がある。

表1 看護学科基礎ゼミⅠ学生自己評価・教員評価項目内容と評定基準

<p>I. 認知領域 (知識・理解・応用, 分析・統合力)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 他の意見を聞いて正しく理解できた。 2. 自分の意見を他者に正確に伝えることができた。 3. ディスカッションを通して知識を統合し、多方面から考察することができた。 1. 文章を正しく読み取ることができた。 2. 話や文章の要点をまとめることができた。 3. 自分の意見を筋道立ててまとめ話し、書くことができた。 <p>II. 精神運動領域 (学習力)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 疑問に対して、文献を活用し調べることができた。 2. 必要な情報を収集することができた。 3. 必要な情報を活用できた。 1. 学生間で十分話し合いながらGWを進めることができた。 2. リーダーシップ・メンバーシップを発揮し協同できた。 3. 計画的に課題に取り組み、学びを共有できた。 <p>III. 情意領域Ⅲ (責任感・積極性・協調性・研究心・価値観)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 他者を尊重し良好な関係を保つことができた。 2. 役割と責任を果たすことができた。 3. 積極的・主体的に学習し参加できた。 4. 課題や疑問に対し、深く探求することができた。 1. 遅刻・早退、欠席がなく、時間を厳守できた。 2. レポートを期限までに提出できた。 1. 健康で、楽しく学ぶことができた。 2. ゼミを通し自分の考え方に影響を受けた。 	<p>評定基準:</p> <ol style="list-style-type: none"> 5. 十分にできた 4. おおむねできた 3. ほぼできた 2. 多少できた 1. できなかった
---	---

高等教育における教養教育の充実した教育展開を目指し、授業内容や教育方法の改善を求められている中、教育のあらゆる場面において、評価を適切に行っていく必要がある。授業目標・内容・方法の振り返りのため、適切な評価手法と評価ツールを活用することは重要であり、今後の課題である。そしてさらに評価が学生と教師のコミュニケーションになるよう努力していかなければならない。

V. まとめ

1. 基礎ゼミ I の評価に情意面を入れた看護学科基礎ゼミ I 評価表を使用し学生と教員が、同じ評価表で評価したことで学生と教員の相互の関連を見ることができた。
2. 教員は学生より高く評定していた。
3. 学生授業評価・教員アンケートでは、教員の評定の高いものは学生の評定も高く、相互作用が示唆された。

謝辞

「基礎ゼミ I」の評価にあたっては、学生の皆様の協力や看護学科の先生方のご協力とアドバイスをいただきました。さらに新潟医療福祉学会でのポスター発表においても、多くの方からご意見をいただきましたことに深く感謝いたします。

文献

- 1) 中央教育審議会は「わが国の高等教育の将来像(答申)」, 2005

- 2) 新潟医療福祉大学 CAMPS GUIDE, 2006
- 3) 鈴木節也: 絶対評価実践マニュアル, 学陽書房, 2002
- 4) 北尾倫彦編集: 自己教育力を考える, 図書文化, 1993
- 5) 梶田毅一: 自己教育への教育, 明治図書, 1985
- 6) 北尾倫彦: 自己学習力を育てる自己評価: 「指導と評価」, 31 巻 5 号 1985,
- 7) 安彦忠彦: 自己評価「自己教育論を超えて」, 図書文化 1993
- 8) 森敏昭 秋田喜代美: 教育評価重要用語 300 の基礎知識, 明治図書, 2000
- 9) 岡田純一: 教育的効果をもたらす評価の理論と実践, 学事出版株式会社, 2003

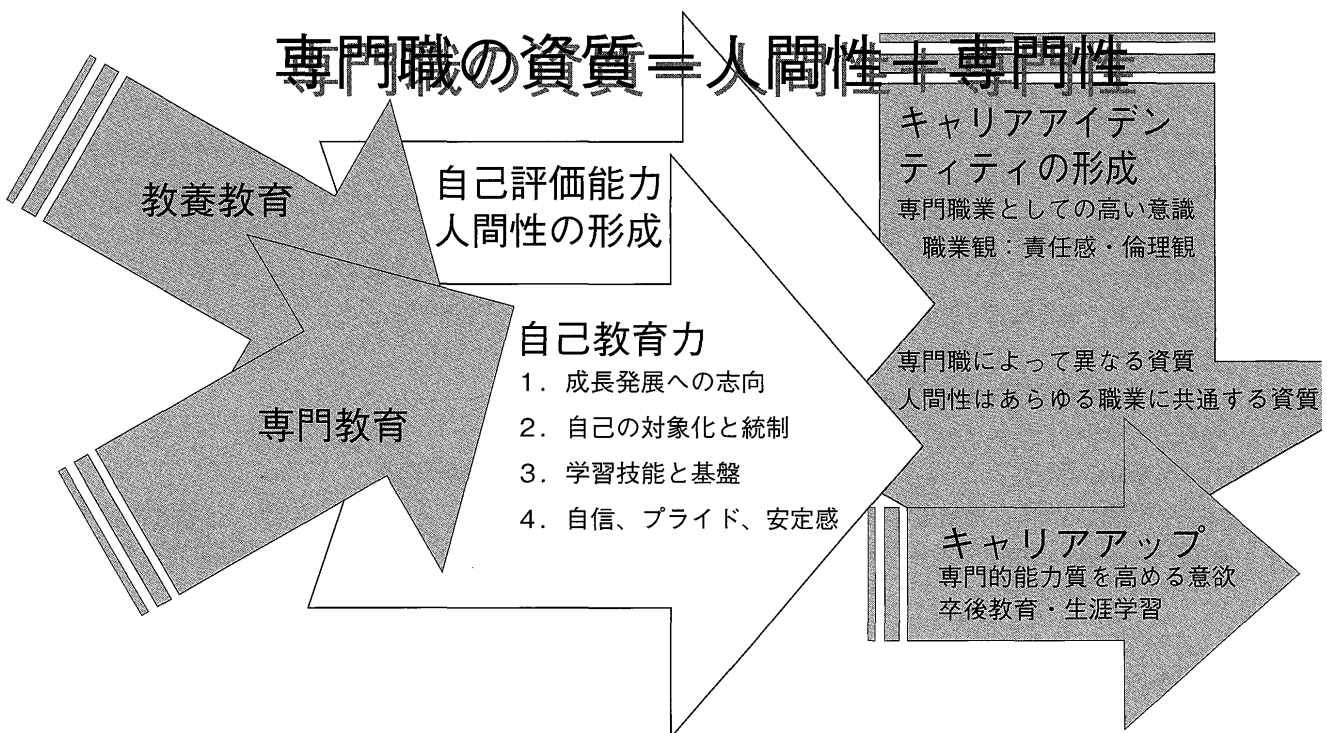


図9 教養教育と専門教育の関連とキャリアアイデンティティの育成